



わかすぎ

2008

第122号



平成20年10月発行

親子で話そう 今日の出来事 一日一回!



鈴鹿市内の外国人児童の授業風景

index

- 02 第30回少年の主張三重県大会報告
- 04 鳥羽市青少年育成市民会議の取り組み
- 05 紀宝町青少年育成町民会議の取り組み

- 06 わかすぎ時評8
鈴鹿市で生活する外国人児童生徒
へ学力の保障
- 08 財団からのお知らせ
編集後記

編集発行

(財)三重こどもわかもの育成財団

〒515-0054 三重県松阪市立野町1291
中部台運動公園内

TEL : 0598-22-4911 FAX : 0598-23-7792
URL : <http://www.mie-cc.or.jp>

第30回少年の主張三重県大会報告

平成20年8月24日（日）、伊勢市生涯学習センターいせトピアにおいて、「第30回少年の主張三重県大会」が開催されました。本年は県内78校から10,634名の応募があり、選ばれた13名が本大会で自らの主張を発表しました。

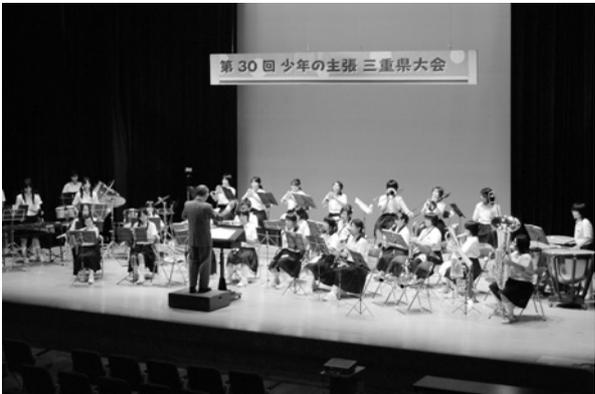
本大会では、伊勢市立倉田山中学校生による司会進行や伊勢市立宮川中学校吹奏楽部による演奏会など、中学生自身による運営コラボレーションが実現し、大会は大いに盛りあがりしました。

なお、来年度は、8月22日（土）津地区（会場：津リージョンプラザ）で開催されます。



審査結果発表

賞	学校名	学年	名 前	タイトル
最優秀賞	津市立東橋内中学校	3年	赤塚 咲穂	帰る場所
優 秀 賞 (順不同)	いなべ市立藤原中学校	3年	新美 友紀	私って不幸なの？
	皇學館中学校	2年	岩井 まりん	コミュニケーションについて
	皇學館中学校	2年	長岡 由莉	今、私にできること
優 良 賞 (順不同)	伊勢市立小俣中学校	1年	角 友博	家族の一員として
	四日市市立大池中学校	2年	遠藤 ルッカス 良	僕は外国人
	皇學館中学校	3年	大原 光絵	母から学んだ大切なこと
	セントヨゼフ女子学園中学校	3年	落合 晃子	「心と言葉」
	大紀町立大宮中学校	3年	中西 由華	夢の進化
	鳥羽市立鏡浦中学校	3年	岩本 清二	我が家はカキ屋
	伊勢市立五十鈴中学校	2年	小澤 真歩	小さなことから始めよう
	木曾岬町立木曾岬中学校	3年	菅沼 祐太	僕の「ルート」と人類
熊野市立荒坂中学校	3年	榎本 和菜	高齢者について	



▲伊勢市立宮川中学校吹奏楽部の演奏会



▲司会の伊勢市立倉田山中学校生の皆さん

最優秀賞 「帰る場所」

津市立東橋内中学校 三年 赤塚 咲穂さん

私は今、児童養護施設にいます。

児童養護施設とは主に、身寄りのない子供や、家族と暮らすのが困難な子供達が暮らしているところです。私は、母子家庭で母親と暮らせない事情があり、今いる施設に入りました。私がここに入ってからのお出来事を紹介します。

私が学校の友達と会話をしている時の事です。友達が、こんな事を言いました。

「ウチ、お母さんとケンカしたんさあ。その時お母さんに『もう学園入れば？そっちの方がいい生活ができるに』って言われた。」と。

なんて無神経な言葉を言うのだろうと、私は思いました。学園をどういうところだと思っているのだろう、と思いました。

たしかに児童養護施設に対する理解は低いと思います。けれど、一般家庭に比べるといろいろ苦労することがあります。例えば、私の部屋は四人部屋なのですが、今は三人で生活しています。三人という数はいいいのですが、あとの二人がとても仲が悪いので、私は間にはさまれ、日々苦労しています。決して友達よりいい生活をしているわけではありません。

親がそんな事をいうのも変ですが、私の友達の中には「学園に入りたい」という人が何人かいます。理由は親がうるさいとか、うっとうしいという事です。でもそれは、児童養護施設にいる人全員に対して、とても失礼な言葉です。施設にいる人のほとんどは、来たくて来ているわけではありません。だから、絶対に言わないで下さい。

家族をどんなにうるさいと思っていても、離れてみれば大切さがわかるはずですが、家に外泊していて、学園に戻ってきて親が帰ろうとすると、泣いて必死に親にしがみつきます。

家族はうっとうしいとか、いなくてもいいなんて、絶対に嘘です。誰にだって家族は必要なものであって、なくてはならないものです。家族とは、血のつながっている人という意味だけではなくて、あなたのことを、ちゃんと知ってくれる、わかってくれる人を家族と呼ぶのではないかと、思います。

私が伝えたいことは、家族の大切さを忘れないでほしいということです。家族のことを、うるさいなあと感じる時は、その時はきっと、家族があなたのことを心配している時です。今、家族と暮らすことができない私だからこそ言えること、それは、家族と、帰る場所があるということは、とても幸せなんだということ。



▲発表者13名の皆さん

鳥羽市青少年育成市民会議の取り組み（平成19年度）

日時：平成19年11月4日（日）13：00～

場所：かんぼの宿鳥羽（凧づくり教室）

■凧づくり教室&新春凧あげ大会

平成20年1月3日に恒例の新春凧あげ大会を開催し6回を数えましたが、お正月の恒例行事として定着してきています。鳥羽市青少年育成市民会議では、数ある行事の中で最も力を入れている取り組みのひとつであり、年々参加者も増えています。その凧あげ行事を通じての取り組みについてご紹介します。

毎年11月頃、大会であげてもらうようにと、凧づくり作家西川正之さんを講師にお招きし、親子凧あげ教室を開催しています。親子で作品作りを楽しむと同時に、子ども間、保護者間の交流の場ともなっています。また、教育委員会生涯学習課と連携し、生涯学習講座でも「凧づくり教室」を設けてもらい、大人にも



▲西川正之さんの指導による凧づくり教室

凧づくりを楽しんでいただいております。こちらは、リピーターの方もおみえになり、一段踏み込んだ凧づくりを楽しんでいただいております。これらの手づくり凧は、昨年あたりから、お正月前に10日間ほど、ショッピングセンターに展示していますが、これも、季節感が感じられると好評をいただき、作り手にも励みになるという声が届いています。

1月3日の大会当日には、世代間にとらわれず子どもから高齢者まで、また、地元の方のみならず、観光客も集まり、誰もが童心にかえて日本の伝統ある「凧あげ」を楽しみました。空高く上がる凧の群れはお正月の風物詩にもなりつつあります。西川さんもご自分で創作された立体凧をあげてくださり、みごとに泳ぐ鳥凧等参加者からは歓声が起きて、ますますの盛り上がりを見せました。

凧あげ大会は、市民参加と伝統芸能を融合させ、健全な青少年育成と地域づくりをみんなの手で着実に進められています。この行事も、継続させてきたからこそ、各種団体との連携、地域とのつながりが深まり、参加の方々の広がりがもてたと思っております。これからの健全育成の取り組みは、少子化にともない難しいとの声も聞きますが、だからこそ、地域のつながりの強化を図り、地域の宝である子どもたちの健やかな成長を育んでいきたいと考えています。

この行事は、たくさんの団体や企業が協賛していただいていることも成功につながっている要因であると思います。また、地域全体での取り組みということが、参加者みんなに実感できるからこそ、来年、さらにその次につなげていくものだと思います。当青少年育成市民会議では、これからも一層、各種団体との横のつながり、参加者の年齢をこえた交わりを軸に、さまざまな行事の実行につなげていきたいと考えております。



▲19年度凧あげ大会の様子

■平成20年度「凧づくり&新春凧あげ大会」のお知らせ

○凧づくり教室

期日：平成20年11月22日（土）

場所：かんぼの宿鳥羽

○新春凧あげ大会

期日：平成21年1月3日（土）

場所：三重県立鳥羽高等学校グラウンド

紀宝町青少年育成町民会議の取り組み（平成20年度）

日時：平成20年7月19日(土)12:00～21日(月)13:00

場所：紀宝町生涯学習センター「まなびの郷」・旧北松杖小学校

■地域ふれあい合宿

地域に住む人々や隣の学校の子たちと、いろんな活動を一緒に行ったり、一緒にキャンプしたりすることで、自分の住む地域をもっと知ったり、いろんな人と知り合って、つながりを作っていくことを目的〔同事業参加募集チラシより〕として、平成20年7月19日から1泊3日で紀宝町生涯学習センター「まなびの郷」・ウミガメ公園・旧北松杖小学校において行われました。

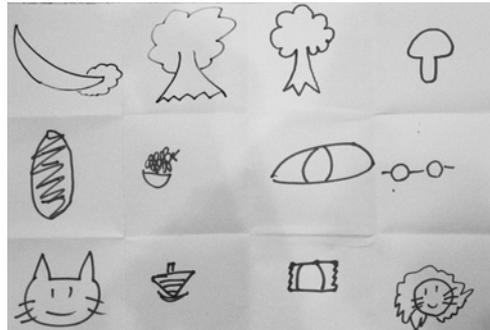
3日間は天気にも恵まれ、元気な子どもたちの歓声を聞くことができました。初日には、子どもたちの緊張をほぐすためのレクリエーション（「熊がでた！」ゲームや「絵しりとり」の作成）が行われ、子どもも大人もなじんだところで、次に研修室にて、食の安全や地元の特産品などを学ぶ（特産品：みかん、めはりずし、しらす等）食育の勉強が行われたあと、食工房で初日の夕食として（シュウマイ、はるさめサラダ、中華風コーンスープ、デザートとしてのりんごパイ等）を作りました。指導は、包丁の使い方から後片付けまであり、子ども達に真剣なまなざしが見られました。

夜には、紀宝町ウミガメ公園のウミガメ研究員谷口さんよりゲーム形式でウミガメの生態や現状を学び、産卵には、アメリカ大陸から太平洋を泳いで渡って来ることや、1回の産卵には約150個の卵を産むことなどを知りますが、紀宝町の海岸に着くまでには、数々の試練が待ち受けていることを学習します。ウミガメに直接触れる機会では、弾力のあるウミガメの肌の感触を確かめていました。

翌日には、昼食に流しそうめんが行われるため、全員自分用の器、箸、皿などを作るため、のこぎりの使い方から切り出しナイフの使い方や竹の性質を学びながらの作業が進められ、途中の休憩時間になっても手を止める子どもはなく熱心に作業を続けていました。

昼からは、コカリナのコンサート鑑賞の後、場所を変えて宿泊地でのキャンプファイヤーや、五右衛門風呂体験・星の観察などをし、翌日大掃除をしてから川舟くだりを体験して、この「地域ふれあい合宿」は終了しました。

なお、この事業は当財団の「地域活動支援事業」の助成事業でもあり、届けられた報告書には「家の手伝いをしてくれるようになった」「いろんな人が自分の為に働いてくれているという事が理解できた」などの感想が寄せられています。



▲わかるかな～、この「絵しりとり」??



▲ねてしまったアオウミガメ



▲初めてナタを使う?



▲切り出しナイフの使い方も次第に上手に?



▲そうめんを待つ子どもたち

【当財団取材より（写真も）】

鈴鹿市で生活する外国人児童生徒へ学力の保障

— 多文化共生教育の推進 —



鈴鹿市教育委員会教育長
水井健次さん

私たちの生活にとって、街中やスーパーマーケットで出会う外国の人たちはごく身近な存在となりました。地域の学校へ登下校する外国の子どもが日本の子どもと何やらお喋りしながら歩く姿もよく見かける光景です。

各市町教育委員会と学校では、外国人児童生徒へのさまざまな取り組みが進んでいる現状です。鈴鹿市教育委員会においても、日本語教育コーディネーターを中心とした「日本語教育担当者ネットワーク会議」による教材作りが進んでいます。そして、プロジェクト会議を設置し、「体系的な日本語指導システム構築」の準備をしています。

今回は、鈴鹿市の水井健次教育長から鈴鹿市で急増する外国人児童生徒、日本人でありながら両親が外国育ちで日本語が十分でない児童生徒への対応についてお話を伺いました。

学校でのコミュニケーションは日本語 — 「体系的な日本語指導システム」へ —



鈴鹿市教育委員会では鈴鹿の学校へ通う外国籍の子どもたちへ、系統的な日本語指導を進めていると伺いましたが、ご説明をいただけますか。

教育長： 鈴鹿市は豊穡な農耕地に恵まれ、併せて自動車産業など三重県内第2位の工業都市です。鈴鹿市では外国人登録数は増加傾向で、外国人児童生徒の在籍数は平成20年度573人ですが、このままいきますと平成25年度には1,000人を超える見通しです。

教育委員会では、子どもたちの人間力育成の源を“学力保障”と考えています。

学校での“学力保障”とは、かけがえのない一人ひとりに「読み・書き・計算」の基礎基本、人間関係をつくる力、豊かな感性や自己肯定感が確実に身に付くことです。この“学力保障”は、当然、外国籍の子どもを含めたものでなければなりません。しかし、彼らには教室での言語理解において課題があります。言葉が判らなければ授業にも集中できませんし、クラスメートともコミュニケーションがスムーズにいきません。このことについては、ずいぶん前から、教育委員会としてもさまざまな取り組みをしてきました。そしてさらに、平成19年度からは、一人ひとりの児童の“学力保障”の第一歩として、早稲田大学大学院日本語教育研究科に協力をいただきながら、「体系的な日本語指導システム」の構築に取り組んでおります。

このシステムの特徴は2つあります。1つは、外国人児童生徒の日本語力を共通のものさし（早稲田大学が開発したバンドスケール）を使って把握し、日本語レベルに応じた指導計画を立てます。

そのことを市内のすべての学校で行うことが1つの特徴です。2つ目は、指導形態の転換です。これまで、教師と子どもの1対1の個別指導で日本語指導を行ってまいりました。今後は日本語レベルと学



▲プリントで今日の復習

年を考慮したグループ分けを行い、集団学習の形態で日本語指導を行うように改善を進めていきます。



▲ひらいて～

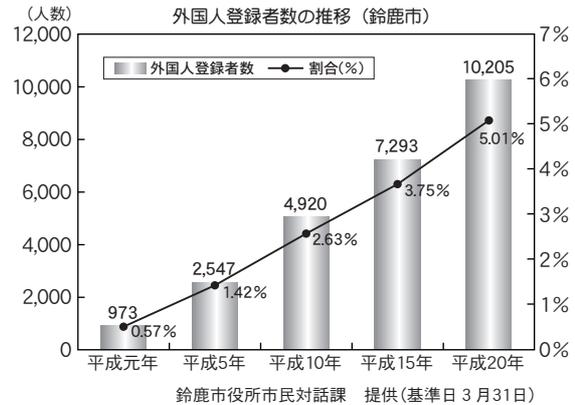
Q

これから進んでいく外国人の定住・永住についてどのように対応していくお考えでしょうか。

教育長： 鈴鹿市民の5%が外国人です。そして、どちらかというとも長期滞在化、あるいは、定住化が進んでいるようです。児童についてはそれぞれの学校にもよりますが、転入や転出が頻繁で、入れ替わりながら増加していく傾向にあります。日本の幼稚園や保育所で日本語の集団生活を経験した児童もいますが、中には小学校へ入学してからはじめて日本語での集団生活が始まる児童もいて、それぞれの児童のレベルに応じた指導・支援が必要となっております。

こういった外国の子どもたちが日本で生きていくためには、日本文化や生活習慣を伝えていくことも大切だと考えております。家庭生活や学校生活を通して身につけていくこともありますが、学校生活を通して様々な形で日本文化を感じ、学んでいくことも多くあります。しかし、いずれの場合も学びの最大の壁は「日本語の習得」になります。

私たちは、その子の日本語レベルに応じてリライト教材（やさしく書き換えたもの）や読みとりシートなどの教材を活用し、できるだけ日本の子どもたちと同じ教科書の学習内容を指導するように取り組んでいます。やさしく書き換えたことにより、日本語の学習をするだけでなく、その内容から日本の文化に触れていくこともたくさんあります。



「多文化共生教育」は、鈴鹿市内すべての学校で

Q

外国人児童生徒教育において、どのようなことが大切だとお考えですか。

教育長： 日本は、昔から子どもを大切にする国ですね。学校における人権教育では、まずは子どもたちが自分を大事にすると共に、相手の人権も認めて大事にすること、そして、人と広く繋がる心地良さを感じるということが大切であると考えております。

教育委員会では、こういった人権意識を高める環境づくりについて、幼稚園・学校任せでなく、行政・地域・家庭が一緒になって取り組んでいく必要があると考えております。外国籍の親へも日本の親へも機会あるごとに理解を求めています。

学校の先生たちは、鈴鹿市内の15か国の国籍の子どもたちへの指導に「体系的な日本語指導システム」を基軸として、様々な国の文化が活かせる教育を進めていく必要性を共有しています。ありがたいことです。

いずれにしても、平成23年には外国人児童の在籍率が20%を超える学校が出るという予測も出ています。学校には多くの課題がありますが、第一歩は多文化共生教育から始まると考えています。

小学校へ来ている外国籍の児童は、日本生れが増加しています。2代目の時代です。教育委員会では、彼等が将来我々の良きパートナーとして育つことを願っています。そのために、今後も学力保障、進路保障に取り組んでいきたいと考えております。

<p>■学校を支援する事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際化対応教員・日本語指導主事の配置 ・外国人児童生徒支援員の配置 ・多文化共生教育研修会の開催 ・国際教室等の活動支援 	<p>■全市的な推進を図る事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「多文化共生教育推進検討会議」の開催 ・「鈴鹿市多文化共生教育推進指針」の推進
<p>■学力を保障する事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路ガイダンスの開催（中学校の外国人生徒対象） ・日本語指導の実践研究（国委嘱事業） 	<p>■就学を支援する事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初期適応指導教室の設置（県委託事業） ・就学ガイダンスの開催と映像資料の追加作成 ・就学適応巡回相談事業
<p>※赤文字は、体系的な日本語指導システムの構築（早稲田大学大学院との協定による協働プロジェクト）</p> <p>■関係機関団体との連携・協働</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人集住都市会議への参画 ・NPO、市民団体との協働 	

さいごに

鈴鹿市は日本書紀に地名の由来伝説が登場します。江戸小紋の「伊勢型紙」、鈴鹿墨、伊勢茶の「かぶせ茶」、水産業では海苔の養殖など鈴鹿市の文化は脈々と続いています。一方で、現在は自動車関連の工業都市としてF1の日本グランプリやオートバイの8時間耐久レースなどで話題になります。鈴鹿に住む人たちが未来へ向かって鈴鹿市を作り上げていくためにも、【多文化共生教育】は重要なポイントだと思いました。

（文責 中西智子）



▲いきいきお楽しみ会の様子

財団からのお知らせ

青少年育成指導者のための研修会

- 日時 平成21年1月24日（土）13：00～16：00
- 場所 三重県総合文化センター 男女共同参画センター 3F セミナー室C
津市一身田上津部田1234（津駅西口から三重交通バスで約5分）TEL：059-233-1111

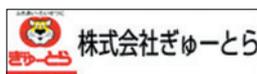
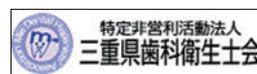
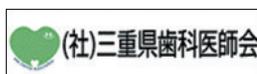
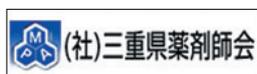
1. 講演

- ・テーマ 「青少年指導のために まず大人が元気になろう」
- ・講師 三重トヨタ自動車株式会社 代表取締役会長 竹林 武一
（財団法人三重こどもわかもの育成財団 理事長）

2. 「平成20年度地域活動者研修会」の実践事例発表（予定）

- ・北勢地区青少年育成市町民会議連絡協議会
- ・南勢志摩地区青少年育成市町民会議連絡協議会
- ・紀南地区青少年育成市町民会議連絡協議会

■第30回少年の主張三重県大会 協賛企業・団体（順不同）



編集後記

日本で働く外国からの労働者の子どもたちを抱えた教育現場では、日本語指導に知恵を絞っています。鈴鹿市では、定住した人たちの子どもが中学校卒業までに日本社会へ適応できることを目標に、そして、高校進学へと進めるように「体系的な日本語指導システム」の完成をめざしています。外国人子女対策の課題にも共通して、このような課題を抱えた学校の存在は珍しくない我が国だと痛感しました。

『わかすぎ』編集長 中西智子